



『女王陛下のロンドン』

先ずは引用から。

*

幼年期から十代のほとんどを劣等感の固まりで過ごした僕は、自分には三流の人生しかのこされていないと思っていた。高校の途中まで体育が（病気で）出来なかった僕は、いつもクラスの隅にいた。小、中学校を通して、気を許す友人は得られなかった。担任の先生と笑顔で話をした楽しい体験なんて一回もなかった。小学校六年の時、修学旅行の準備のため、六年生全員が体育館に集められた。「好きな者同士で電車の席決めと旅館の部屋割りを決めなさい」と言う先生の言葉に生徒は歓声を上げたが、僕を入れてくれる班は一つとしてなかった。僕がそれまで一番仲が良いと思っていた男子生徒の所へ、藁をも掴む気持ちで近づいていくと、彼は人一倍大きな声で「お前なんか嫌だよ。来るなよ」と僕を拒絶した。一事が万事、こんなことのくり返して毎日を過ごしていた。

僕が居ても良いところがこの世にあるのだろうか。

人間は誰しも他人に解らないところでコンプレックスをもっている。それを人生の負と考えないで味方にして生きていく道が残されているのではないだろうか。同年輩の人たちと同じスタート地点に立ちたい。そう思う一心で半年のつもりでイギリスに旅立った。そして次に日本に帰ってきたのは、八年半後のことだった。ほとんど貧困と寒さと孤独の仲で過ごした。しかしその時間があったからこそ、様々な人と会い、写真が撮れて、そして何より個展が開けた。

また今思えば、幼少の時の絶望感があった

からこそ、僕がカメラを持った時、暖かい、優しい人間の幸せの一瞬を撮りたいという願望につながったのだ。

救われることに、この社会には自分のペースでこつこつと努力している人たちがどこかにいる。同級生たちはとっくに次のコーナーを回り、その後ろ姿さえ見えない。でも人にはそれぞれのペースがある。慌てなくても良い。一発逆転だってあるのだ。せめて一つのことに真面目でありさえすれば。そして誠実に生きていたら、いつかはきっと…。

*

これは、何気ない表情のうちに人間の優しさの本質を捉える写真家、ハービー・山口氏のエッセイ『女王陛下のロンドン』（講談社文庫、2002）の一節である。脊椎の病気で高校まで自由に体を動かすことができず、コンプレックスの固まりだった氏は、カメラを友として暮らしていた。そして、何とか普通の生活ができるようになった二十代の初め、自分の写真表現を求めてイギリスに旅立つ。現地での様々な交流、そして、日本での様々な出会いを通じて、彼は彼にしか撮れない独自の世界を獲得していく。その若き日の、かけがえのないめくるめく体験を見事な文章でつづった珠玉のエッセイである。

残念ながらこの『女王陛下〜』は古書店でしか手に入れられなくなってしまったが、素敵な写真も満載の『雲の上はいつも青空』（玄光社、2011・2014）は手に入る。ちょっと変化球ではあるのだが、進路に（生き方に）、そして友だちとの人間関係に迷っている人は、手に取ってみたらどうだろう。